

「文化・芸術の力」が築く 心豊かで平穏な未来へ

滋慶学園グループ 総長
The Symphony Hall 総監
(関西経済同友会 文化・芸術の力委員会 委員長)
浮舟 邦彦



東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第7回は、滋慶学園グループ総長として長年学校経営に携わり、同時にThe Symphony Hall総監や東京フィル理事など、文化芸術をさまざまに支える活動を続けてこられた、浮舟邦彦様です。

美しい秋の空、紅葉に彩られる山々。その美しさを眺めながら毎年この季節になると1年を振り返ります。学校経営を始めて45年、私の人生に多くの彩と余裕を与えてくれたのが、文化・芸術ではないかと思いつく実感します。思考を支える左脳と感性を育てる右脳のバランスが大切なのだらうと感じています。

12月になると第九を聴き、大晦日は家族でジルベスターコンサート。そして初詣に出かける。クラシック音楽が昔から好きだった私にとって、こうした越年が至福の思い出となり、今なお続けています。コロナ禍によりそうした至福の時間の多くが奪われました。

文化・芸術鑑賞は「不要不急」なのか？ 大きな議論も呼びました。先日来日した世界的なピアニストで指揮者のバレンボイム氏は「人間に取って精神性は不可欠であり、古来から人間の高度な精神性を支えて来たのが文化・芸術である」と説かれています。40年ほど前にグループ内に音楽の学校を作り、舞台芸術をサポートする人材育成を始め、縁が有って東京フィルの理

事に就任し、文化・芸術を支える仕事を始めました。

そして2014年には日本初のクラシック音楽専用ホール、大阪の「The Symphony Hall」をこれまた縁あって引き継ぎました。私達の生活に欠かす事の出来ない大切な文化・芸術と日本に初めて出来たクラシック音楽専用ホール。この歴史と伝統の文化資産を未来に継承していきたい。この事が、心豊かで平穏な社会を未来へ継承する一助となるのではないか。そんな一念で今も続けています。

直接「見て、聴いて、感じ、考える」。ポストコロナ時代、急速なデジタル化とヴァーチャル化の波の中で、私はこれからもリアルにクラシック音楽と触れ合い、心のバランスを整え、社会に貢献していきたいと考えています。「触れてよし」「深みにハマって更によし」。

2022年平常な世となり、「文化・芸術の力」が発揮され、社会・経済の再起動を牽引する時代が来ることを願っています。

これからも東京フィルを愛して下さるファンの皆さんと共に楽団を支えたい。笑顔でホールで出会い、音楽を楽しみ、文化・芸術を語り合える、そんな日常を楽しみたいと思っています。



日本初のクラシック音楽専用
ホール「The Symphony Hall」

浮舟邦彦 (うきふね・くにひこ)

1941年大阪府生まれ。1964年関西学院大学法学部卒業。1983年学校法人滋慶学園理事長、1987年大阪滋慶学園理事長、滋慶学園グループ総長。医療秘書教育全国協議会理事長。米州立ウエストフロリダ大学、韓国啓明大学など名誉博士。
平成13(2001)年より公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団理事。

滋慶学園グループ様は、浮舟邦彦氏が1976年に開校した新大阪歯科技工士学院(現専門学校)や滋慶医療科学大学、同大学院、専門学校など計79校(学生約3万7千人)を東京、大阪など全国に展開する教育グループです。ザ・シンフォニーホール、株式会社ジャパン・アーツなど多くの企業・団体が構成メンバーです。